

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	キッズボンド竹鼻			
○保護者評価実施期間	2025年 11月 1日 ～ 2025年 11月 30日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	18	(回答者数)	14
○従業員評価実施期間	2025年 11月 1日 ～ 2025年 11月 30日			
○従業員評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数)	10
○事業者向け自己評価表作成日	2025年 12月 20日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	<p>【幅広い年齢層の職員体制】</p> <p>保育士資格、教員免許、言語聴覚士免許を持った幅広い年齢層の職員体制</p> <p>【専門職と研修体制】</p> <p>スーパーバイザー、社内の専門職チーム（運動・言語・心理）、コーディネーターチームと連携し、日常の支援へ専門的視点を適切に反映。定例研修では障がい特性に加え、法令やメンタルヘルスも継続的に学ぶ環境を整えている。</p>	<p>・スーパーバイザー、専門職、コーディネーターチーム同席のケース検討を実施し、方針を次回支援計画へ反映。</p> <p>・実地研修とオンライン研修を併用し、月2回以上の研修機会を確保。受講履歴と振り返りを記録化。</p> <p>・発達障害外来で使う検査の大半を自社実施できる体制を確立。</p>	<p>・年間研修計画を「障害の基礎知識／法令／メンタルヘルスケア／管理者研修」の4領域で編成し、研修→現場転移をセットで定着化している。</p> <p>・困った時の専門家への相談ラインを確保。早期にヒアリング、ケース検討の仕組みを確立している。</p>
2	<p>【記録と相談の即時性】</p> <p>議事録の作成・共有と受け入れ前ミーティングでのショートレビューを通じて、疑問点を早期に解消し、職員間で支援方針を統一している。</p>	<p>・受け入れ前ミーティングで当日の役割と支援内容を確認。ショートレビューで気づきを共有。</p> <p>・当日中の記録を徹底し、定期モニタリングで計画の見直し可否を判断に使用している。</p> <p>・個々にあった個別課題（プリントや手先を使った作業課題など）の工夫をしている。</p>	<p>・困った時の相談ラインを複数確保。体制の周知と迅速・適切対応を徹底している。</p> <p>・ヒヤリハットの迅速な報告を義務化している。再発防止策をフィードバック、全社共有を徹底している。</p>

3	<p>【環境を活かした活動設計】</p> <p>広い活動室を活かし、サーキット等の粗大運動や集団活動を取り入れることで、楽しさと達成感を両立したプログラムを提供している。</p> <p>【個別療育・集団療育の適切なバランス】</p> <p>個別療育と集団療育の両方の機会を提供している。</p>	<p>・個別活動＋集団活動を子どもの状況に応じて適宜組み合わせ、広い訓練指導室を活かした粗大運動・集団活動を計画運用。</p> <p>・ガイドラインの基本活動を複数組合せ、子どもの自己選択・自己決定の機会を意図的に設定。</p>	<p>・活動の様子をHP／通信で公表・周知している。</p> <p>・社会資源活用を機会を年次計画に組み込み、長期休暇も含めた多様な活動を展開している。</p> <p>・個別の成功体験を集団活動につなげられるよう、活動内容を工夫している。</p> <p>・児童の状態に応じて、活動中の一時離席や個別休憩を柔軟に認めている。</p>
---	---	--	---

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者会や保護者参加型のプログラムが実施できていない。	<p>・就労家庭が多く、時間帯・移動の制約が大きい。</p> <p>・目的（家族支援・情報提供・交流）の価値が伝わりにくい。</p> <p>・実施後のフィードバック→次回改善の仕組みを周知していない。</p>	<p>・参加形態を複線化：夜間枠（例：19:30～20:00）、土曜午前枠（例：11:00～11:30）教室参加とオンライン参加のいずれかを選べるようにする。参加できなかった保護者へ、後日内容を共有できる仕組みを設ける。</p> <p>・テーマはガイドライン準拠（例：ペアトレ／合理的配慮／家庭での見立て）。</p> <p>・きょうだい配慮：同時時間帯に簡単な活動を設定し同伴可とする。</p>
2	学校との連携が不十分に感じる。	<p>・学校ごとに放デイの理解・窓口運用がバラつくため、情報交換（年間計画・行事・下校時刻等）が不定期。</p> <p>・共有様式（連絡票・合理的配慮フィードバック）が統一されておらず、現場依存のやり取りになっている。</p> <p>・進学・卒業時の移行期支援で情報が十分に引き継がれないケースがある。</p>	<p>・進学・卒業時は移行期ケース会議の実施をはたらきかける。</p> <p>・連携の可視化：会議開催数を集計し、自己評価の“工夫・改善目標”として公表することを検討。</p>
3	児童の状態変化への対応の難しさがある。	<p>・児童の心身の状態が日によって大きく変動し、事前の予測が難しい。</p> <p>・人員体制に余裕がない時間帯があり、個別対応が難しい場面がある。</p> <p>・状態が落ち着くまで待つための「代替活動」や「静かなスペース」が不足している。</p>	<p>・朝・来所時の状態確認ルーティンを標準化し、心身の状態の変動を小さくする。</p> <p>・活動導線の工夫や事前準備の簡素化により、支援の同時並行を可能にする。</p> <p>・スペースが限られている場合、可動式パーテーション等を活用し簡易な区分けを行う。</p>